4-8	演題	ご利用者の QOL 向上を目指して
	副題	～脳機能との関連における一試行～

		法人名	社会福祉法人 道志会
		施設名	道志会老人ホーム

発表者名（職種）	山口　武志 その他
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	綾瀬市早川城山 2-11-3
TEL	0467-76-3399
FAX	0467-70-4770
メールアドレス	dsknh3399@gmail.com
URL	

今回の発表施設またはサービスの概要	社会福祉法人道志会老人ホーム 施設の理念 「福祉是愛」 入居者定員：本入所 90 名、ショートステイ 10 名 3 フロアで軽度・重度・認知症で区分けされ、専門的知識や技術の習得と専門性に特化するために区分けされております。

研究の目的、PR ポイント

施設で過ごされている利用者の残存能力の維持、増進に機能訓練指導員としてできることは何かと試行を重ねているうちに、ある方向をもった感触らしきものが得られたので、多くの方の知識や意見を受け、更なる進展を目指したく発表に及びました。

取り組んだ課題

身体機能訓練と脳機能訓練の相互作用的な活用を図らなければ施設入居者の残存能力の維持、向上には十分でないことを肌で実感しました。特に脳機能の低下予防がいかに重要であるかを深く認識するようになりました。
そこで脳機能と身体機能のメカニズムに関心をもちながら、脳機能の衰退減少に向けて種々の取り組みを試みました。

具体的な取り組み

要介護 5　認知症自立度Ⅱａ
要介護 5　認知症自立度Ⅲａ　計 2 名の方を対象に下記の取り組みを行いました。
第 1 の取り組みは、利用者に図 1 の計算式（足し算、引き算の計算式）の回答を口ずさみながら図 2 の刺激係数の高い図形（ピラミッド型の大三角形の中に小さな三角形が多数配置されている）を目にすることで脳の左半球の新皮質後部を使い、同図形の中から計算式の答えである数字を探すことで集中力を練ることにもなります。指差し選定による回答方式とした理由は、手指を適度に刺激することによって脳の働きを活発にすることが狙いです。
第 2 の取り組みは、図 3（動物の全体像を半切したもの）のように、動物の全体像を 2 分の 1 にカットしたカードを複数ランダムに並べて、その中から、利用者に動物の姿の完成（2 枚 1 組）を求めると同時にその動物の名称を言語でも認識してもらうものです。手のひらや手指を使用して、動物の姿とその名称を、分断されたカードを並べ替えながら動物の姿を完成させることで、身体の活動と脳機能の活性化の共働きを図ります。
以上の取り組みについては、当職 1 名で、利用者 1 名につき所要時間 20 分を週 3 回実施しました。

活動の成果と評価

今回の取り組みの結果、従来言葉を交わさなかった利用者が単語だけを表音して当職に接近してくるようになったり、利用者の得意分野の話をしながら同人に筆記具と紙を渡してみたところ、カレー料理の具材やレシピを紙に表記するようになりました。また、トレイ（縦 30㎝、横 40㎝）に乗った食事の左側部分（全体の 5 分の 1 程度）を残していた利用者（脳出血の既往歴があることから「半側空間無視」の可能性がある。）がトレイ上の食事を完食するようになったなどの変化が見られました。
なお、評価に関しては、参考資料の 3 により、当職の判定で、いずれも 1 段階の上昇が認められました。

今後の課題

今後も、利用者の残存能力の把握に努め、脳機能及び身体活動能力の減少を招かないよう例示した項目の種類を増やし種々工夫を凝らしながら、一層尽力したいと考えています。

参考資料など

1　認知症ケアの予防とケア
　公益財団法人長寿科学振興財団
　第 4 章認知症の予防　4、運動の視点から
　島田　裕之（国立長寿医療研究センター部長）
2　第 4 章認知症の予防　6、社会的交流・知的活動の視点から
　藤原　佳典（東京都健康長寿医療センター研究所部長）
3　FIM 講習会資料
　慶應義塾大学医学部
　リハビリテーション医学教室
4　スッキリハッキリ頭の健康法
　日本実業出版社
　高橋　浩（NHK 中央研修所教授）
5　札幌医科大学リハビリテーション医学講座（2016.12.31）
　石合　純夫